

## 四 は れ

溫和し過ぎる、遠慮過ぎる、引込み過ぎる。我等技術家は此意味に於て既に或鑄型に笱つて居る。餘りに其消極的立場を墨守するに馴れて自ら其天地を狭めて居る。細故より細故を追ふて走るのが爲めに却つて大局に眼が届かぬとの世評を強ち一嚟に附し去り難き迄に、餘りに自家の技能を偏重するに囚はれて居る。

否道にそのみならず、寧ろ極言すれば氣質の柔和なるもの、謙虚なるもの、小心なるもの、氣後れ勝ちなるものにして、初めて斯界に志願するのではないかと思はるゝ程迄、片寄り來つた氣味がある。今の我技術家の立場は或は丁度其人達の性情の眞に適する所以のものであるかも知らぬが然かも活社會の活人たるべき我等が眞面目を斯くして遂に如何である。

我等は過去の我技術界が頗る順當に進歩し發展したるを祝福するに於て、敢て人後に落ちざるものである。が、其半面に於て、寧ろ其發展が從來餘りに順當に餘りに平穩に進み過

ぎたるのでないかを疑はざるを得ぬ。

惟ふに過去三四十年、海外に於ける斯界の活躍は實に急激なるものであつた、と同時に専らその移植に眼めた我國家の意氣込みも亦頗る目覺ましいことであつた。されば其間、其目まぐるしき許りに變化し旋轉する斯界の新相に着目し吟味し咀嚼し及び進むで其輸入の仲介者として立つた我技術家の任務は同時に最も多忙なるものゝ一つだつたであらう。多忙は仕合せである、繁昌は結構である。が併しながら憾むらくは我等は一方に其任務の餘りに多忙なるに驅られて却つて多くの餘裕を自己に持ち得なかつたではあるまいか。

他方には又餘りに其得意の境遇に馴れ其特殊の技能に満足して以て自ら得たりとし過ぎたではあるまいか。

然かも餘裕を持たぬ人は禍である、内省の暇なき人は不幸である。渠の着眼は勢ひ狭からざるを得ぬ、渠の識見は自づと偏せざるを得ぬ。我等に潑漣の生彩なく氣焰なく彈力なき所以のものは畢竟それが爲めではないか。境遇に馴れ技能に安んずるの人も亦禍である。渠には鬱勃の霸氣あるを得ぬ、滿々の野心あるを得ぬ、渠が専念其職分を守つて移るを知らざる間に勢ひ其思想は固定し其行動は滅入らざるを得ぬ。我等が恰も重寶なる活きた機械かの如くに他より見

下げらるゝの素地も亦自づと此間に胚胎したのではないか  
 斯く云ふの或は我敬愛する幾多の先輩諸君を蔑如するに  
 似たるかも知らぬ。されど我等は只抽象的に斯界發展の一  
 面に伴ふ自然の推移を指摘せんと欲するのみである、假初に  
 も以て先輩努力の跡を是非せん積りてはない。然かも聞か  
 れよ、世に藝術を進むる者は名人なれども、同時に其藝術を損  
 ふ者も亦名人であるとの諺がある。これ名人一たび出て、  
 一種の典型を作れば、後進者は只譯もなく其典型に魅せられ  
 て只管之れに隨喜し渴仰するの餘り、却て其以外に廣濶なる  
 自由の天地あるを忘るゝに至るを指すのでは無いか。我等

は我國今日の技術界を斯くまで盛大に開拓し得たる我凡て  
 の先輩を尊敬するに於て何等遲疑するものではないが併か  
 も憂ふる處は諸君出色の進路が寧ろ一種の典型として後進  
 者の眼を眩し、一圖に其道程其舉止を追ふて敢て自ら顧みざ  
 るの態度である。當年の時勢を知らず其心持を解せずして  
 漫ろに其進路を羨望し其云爲を模倣し重ねてこれを蟬脱す  
 る所以のものを知らず又蟬脱せんとも欲せず滔々として相  
 率ゐてより小により窮窟なる程楮裡に順次萎縮し退嬰し去  
 るその若輩の行動のそれが果して先輩の素志たるであらう  
 か。

見よ、後進者の凡ては寧ろ當初よりして、技術とは斯くの如きものである、技術家とは所詮斯うしたものである、先輩者の逕路も寔に此の如くである、自分等の行動も亦正に斯くあらねばならぬと、至極素直に、無雜作に、其職分其心得を合點し去つて又何等の疑惑をだも挿まず。即ち其足一たび斯界に入ると同時に、渠等が颯爽の意氣も頓に滅入り、奔放の雄志も乍ちに摧けて、一意只無言に、溫和に、無難に、從順に、——然かも一面よりすれば又頗る陰氣に、臆病に、將た偏狹に——己れを處し去りがちでは無いか。即ち其處に自然と沈滞し切つた濕つばい一種の空氣、窮窟げなる一種の鑄型——敢てこれを技術家氣

質と云はうか——が醸成せられて、若輩ほどは尙更強く其氣分に壓せられ固く其鑄型に鎖され終るではないか。然かもそをよく忍び得るものにして初めて『技術家』たり、然らざるものは寧ろ我より避けて他に遁路を求むるにも至らば、則ち斯かる天地の日を追ふて愈々單調に歸し平凡に化するも亦實に止むなき次第ではないか。

あはれ、堂々たる『技術』の大旆を擁して幾萬千とも數知らぬ大衆が、尙更後から後へと駆付け付くるなる後進者と共に、辿り行く一路の如何に落寞たり蕭條たるものにてあるぞ。渠等は只濕やかに、無言に、神妙に剩つさへ個人的にも社會的にも

氣の毒な程肩身を窄めて、一意先達の廻るが儘を目當てに踏力なき足拍子を運ばせながら、僅に手近き仲間内許りて、同病窃に相憐む小不平の吐合ひか、さらずば自畫自贊の獨りよがり、強ゐても淋しき満足を慰め合ひつゝ、進むの、さても何たる氣疎き痛ましきであらう。

此の頃の自畫自贊は、先達の廻るが儘に踏力なき足拍子を運ばせながら、僅に手近き仲間内許りて、同病窃に相憐む小不平の吐合ひか、さらずば自畫自贊の獨りよがり、強ゐても淋しき満足を慰め合ひつゝ、進むの、さても何たる氣疎き痛ましきであらう。